

周防畑遺跡群 大豆田遺跡V
鳴澤遺跡群 古仁田遺跡II

長野県佐久市長土呂 大豆田遺跡V・
根々井 古仁田遺跡II 発掘調査報告書

2018.10

佐久市教育委員会

目 次

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
第1節 自然的環境	3
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の方法	
第1節 調査の方法	7
第2節 大豆田遺跡Ⅴ基本層序	8



大豆田遺跡Ⅴ西側調査区近景
中部横断自動車道の遠方には御牧ヶ原古地とその後方にアルプスの山並みを望む。

周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅴ

第Ⅳ章 大豆田遺跡Ⅴの調査	
第1節 竪穴住居址	
(1) H1号住居址	10
(2) H2号住居址	11
(3) H3号住居址	11
(4) H4号住居址	12
(5) H5号住居址	14
第2節 竪穴状遺構	
(1) Ta1号竪穴状遺構	15
第3節 土坑	
(1) D1号土坑	16
(2) D2号土坑	16
(3) D3号土坑	16
(4) D4号土坑	16
(5) D5号土坑	16
(6) D6号土坑	16
(7) D7号土坑	16
(8) D8号土坑	18
(9) D9号土坑	18
(10) D10号土坑	18
(11) D11号土坑	19
(12) D12号土坑	19
(13) D13号土坑	20
(14) D14号土坑	20
(15) D15号土坑	20
(16) D16号土坑	20
第4節 溝状遺構	
(1) M1号溝状遺構	20
(2) M2号溝状遺構	20
(3) M3号溝状遺構	22
(4) M4号溝状遺構	22
(5) M5号溝状遺構	22
(6) M6号溝状遺構	22
第5節 単独ピット	22
第Ⅴ章 調査のまとめ	23

写真図版 遺構図版・遺物図版

鳴澤遺跡群 古仁田遺跡Ⅱ

第Ⅵ章 古仁田遺跡Ⅱの調査	
第1節 遺構・遺物の概要	41
第2節 基本層序	42
第Ⅶ章 遺構と遺物	
(1) M J 溝状遺構	43
(2) M 1 号溝跡	43
(3) D 1 号土坑	43

写真図版

抄 録

例 言

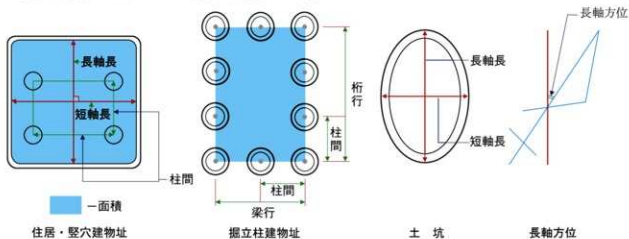
1. 本書はJA佐久浅間 株式会社アメックが行う宅地造成工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 JA佐久浅間 株式会社アメック
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 調査地点 大豆田遺跡Ⅴ 佐久市長土呂1723-1 外
古仁田遺跡Ⅱ 佐久市根々井字駒場1074-1、1074-2
5. 遺跡名及び面積 大豆田遺跡Ⅴ (NSOV) 761㎡
古仁田遺跡Ⅱ (NKOⅡ) 94㎡
6. 発掘・整理・執筆担当者 大豆田遺跡Ⅴ 富沢一明
古仁田遺跡Ⅱ 上原 学

なお、陶磁器類は助長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏にご教示いただいた。

7. 本書に掲載した出土 遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は堅穴住居址-H、堅穴状遺構-Ta、土坑-D、溝状遺構-M、溝跡-MJ、ピット-Pである。
2. 挿図の縮尺は遺構1/80、遺物で土器・石器1/4、金属製品1/2を基本とする。それ以外のは挿図中にスケールを記載した。遺物写真は大豆田遺跡Ⅴが1/4、古仁田遺跡Ⅱが1/3で掲載した。
3. 遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記した。
4. 土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。()は推定値、< >は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



- ・遺構計測表中の()は推定値、< >は残存値。数値単位はmと㎡であり、その他は表中に記載した。
- ・遺構深度は数値の範囲を示しているものは平均値である。
- ・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が1割を超えたものを長方形とした。
- ・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

8. 挿図中における網掛けは以下を示す。



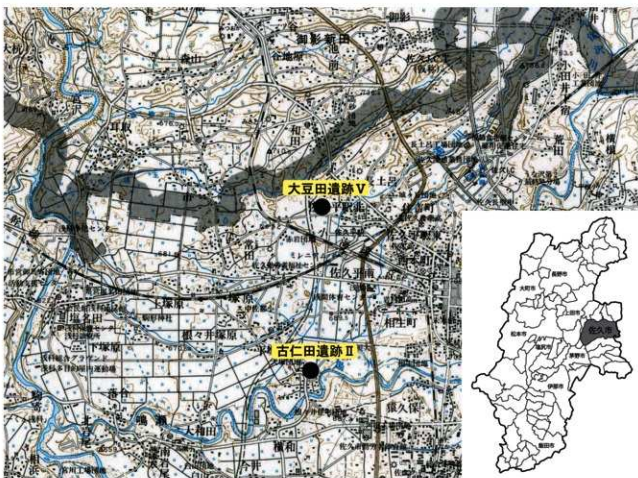
第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

大豆田遺跡Vは周防畑遺跡群の南端に所在し、標高704mを僅かに越える台地南端に位置する。調査地点の地形は北から南へと伸びる「田切」に挟まれた低い台地で、この台地は調査地点付近で沖積低地へ変わっていく。遺跡周辺は中部横断自動車道建設や新小学校建設、区画整理事業等で多くの発掘調査がなされ、資料の蓄積が進む地域である。発見された遺構としては、弥生時代後期の所産と考えられる国内で最大級の規模となる18×9.5mの堅穴住居址や四隅溝が切れるタイプの方形周溝墓や円形周溝墓が集落に接して検出されている。また、周辺の遺跡からは7世紀末と考えられる「川原寺式」の軒丸瓦や布目瓦が出土している。

次に、古仁田遺跡IIは鳴澤遺跡群の南端に所在し、湯川の第二段丘南端部付近に所在する。標高は約680mを測り、湯川との比高差は20～30mである。西側には古墳時代の墳丘墓と考えられる根々井大塚古墳が所在し、平成9年には墳頂部付近の確認調査が実施され、古墳時代前期の土器やガラス小玉等が出土している。また、平成25年には西側に隣接する道路改良工事に伴い、古仁田遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代後期の遺構・遺物が調査されている。

今回、各遺跡内でJA佐久浅間 株式会社アメックにより宅地造成が計画され、文化財保護法93条が佐久市教育委員会に届け出され、当該地の試掘調査が行われた。結果、予定地内から遺構が発見され、工事による遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 大豆田遺跡V・古仁田遺跡II位置図 (1/50000)

第2節 調査体制

平成29・30年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤 晴樹			
事務局	社会教育部長	萩原幸一	(平成29年度)	青木 源	(平成30年度)	
	文化振興課長	小林義夫				
	企画幹	小林登志郎	(平成29年度)	武者新一	(平成30年度)	
	文化財調査係長	大塚広樹	(平成29年4月～9月)	塩川宏幸	(平成29年10月～)	
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明	上原 学	久保浩一郎	
		岩下 琴	(平成30年6月まで)	荻原義治	(平成30年7月～)	
	臨時職員	森泉かよ子				

大豆田遺跡Ⅴ

調査担当	富沢一明					
調査員	赤羽根 篤	赤羽根充江	岩崎重子	橋詰勝子	橋詰信子	堀籠保子
	木内修一	小林妙子	中澤 登	堀籠まゆみ	甘利隆雄	岩松茂年
	柳澤孝子	田中ひさ子	羽毛田敏明	横尾敏雄	依田好行	小林敏雄
	山田叔正	油井満芳	浅沼勝男	堺 益子	清水律子	

古仁田遺跡Ⅱ

調査担当	上原 学					
調査員	赤羽根篤	浅沼勝男	甘利隆雄	木内修一	武者幸彦	横尾敏雄
	渡辺 学	清水律子	田中ひさ子			

第3節 調査日誌

大豆田遺跡Ⅴ

平成29年

- 7月3日 株式会社アメックより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出(保護法93条第1項)
- 7月18日 長野県教育委員会教育長より29教文第7-662号にて通知。
- 9月20～25日 市教育委員会文化振興課により試掘調査。
- 9月27日 株式会社アメックより埋蔵文化財発掘調査費の見積もりについての依頼。
- 11月6日 周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅴとして発掘調査開始。
- 11月29日 発掘調査を終了し整理を作業開始。

古仁田遺跡Ⅱ

平成29年

- 11月24日 表土除去作業。機材準備。溝状遺構掘り下げ開始。
- 11月27日 遺構検出作業。溝状遺構・溝跡・土坑検出。溝状遺構掘り下げ。
- 11月28日 溝状遺構掘り下げ。
- 11月29日 溝状遺構・溝跡・土坑掘り下げ。遺構図面作成。遺構・遺跡全体写真撮影作業。
- 11月30日 機材撤収作業。現場作業終了。
- 12月4日～ 室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、実測、原稿作成等を順次行う。

平成30年

- 3月12日 平成29年度の整理作業を終了する。
- 4月13日 株式会社アメックと埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
- 7月9日 大豆田遺跡Ⅴと古仁田遺跡Ⅱ原稿入稿。
- 10月31日 第255集刊行。

第2節 歴史的環境

今回調査した周防畑遺跡群や鳴瀬遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに関連する開発等で1980年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。大豆田遺跡に隣接する近津遺跡群から縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は見られていない。また、湯川対岸の寺畑遺跡からは市内で唯一まとまった資料として草創期の爪形土器が出土している。縄文期の集落が見られているのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側であり、縄文時代に佐久平中心部の平地は主に狩場として利用されていたと考えられる。

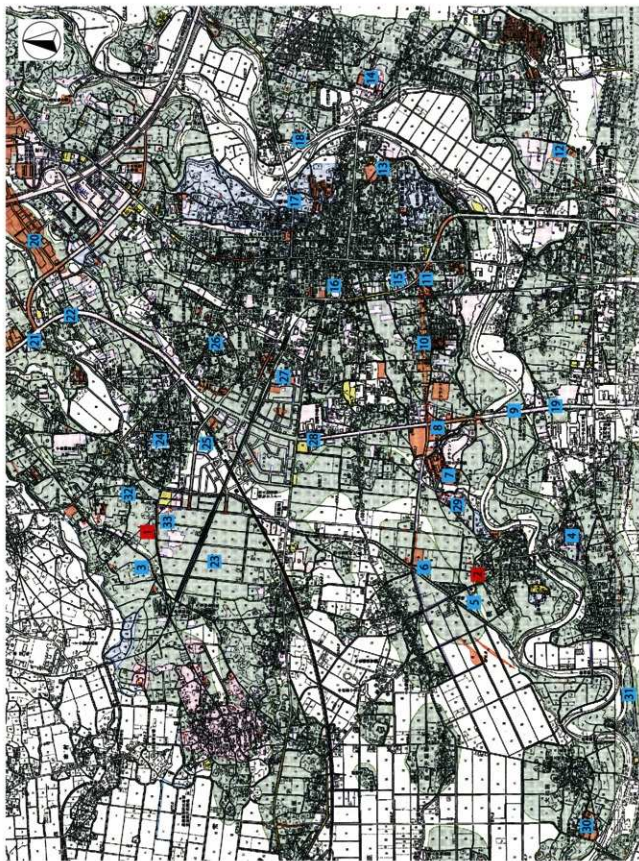
次に弥生時代は、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少ない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑よりⅡ式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡Ⅱからは、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。次に中期では遺跡数も増え集落址が確認される。湯川下流より、川原端遺跡・森平遺跡・寄塚遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相は根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても立地は湯川沿岸を指向する。佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の諸々の活動において重要な位置を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該時期の遺跡からは西近津遺跡より国内で最大級となる18×9.5mの堅穴住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅劍15本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が開展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっている。特に上聖遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で100軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落遷地の理由が大きく変わった。或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が開展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居址数は増すが住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に周防畑遺跡群付近の調査事例で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代「大井郷」の核地域であろうことが推測されている。また、仲田遺跡からは花弁双蝶八花鏡や「□□寺」の墨書土器が出土し寺域の存在を示唆している。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚載』によれば「その賑わい国府にまさり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑地の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	周防畑遺跡群	大豆田遺跡Ⅴ	長土呂		本報告書
2	鳴澤遺跡群	古仁田遺跡Ⅱ	根々井		本報告書
3	近津遺跡群		長土呂宇西近津・森下	竪穴住605(縄文～平安)、竪立80、土坑3、周溝溝13	県調査
4	宮の上遺跡群	根々井芝宮遺跡	根々井芝宮	竪穴住(弥生43・古墳3・平安14)、竪立3、土坑27、溝5	第49集
5	根々井大塚古墳		根々井大塚	方形墳丘墓1	年報9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田宇西一里塚	竪穴住(弥生後期11)、周溝墓1、環溝、土坑7、溝6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田宇北西ノ久保	竪穴住(弥生中期91・弥生後期38・古墳中期20)	
		西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ	岩村田宇西一本柳	竪穴住201(弥生～平安)、竪立45、土坑12、溝11	第73集
		西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田宇上樋田	竪穴住(弥生中期3・弥生後期1・古墳後期2・奈良1)、溝	第91集
		西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田宇西一本柳	竪穴住(弥生中期7・後期2・古墳後期6・奈・平1)、竪立5、土坑8、溝6	年報8
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田宇下樋田	竪穴住(弥生中期9・弥生後期7・古墳中期6・古墳後期42・奈良16・平安9・不明2)、竪立30、土坑51、溝13	第109集
		西一本柳遺跡Ⅸ	岩村田宇西一本柳	竪穴住(古墳後期16・奈良1・平安2・竪穴状2)、竪立9、土坑12	第113集
		西一本柳遺跡Ⅹ	岩村田宇西一本柳	竪穴住(弥生中期34・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、竪立14、土坑19、溝14	年報14
		西一本柳遺跡Ⅺ	岩村田宇下樋田	竪穴住(弥生中期1・弥生後期1)、溝	年報13
		西一本柳遺跡Ⅻ	岩村田宇下樋田	竪穴住(古墳後期5・奈良1・竪穴状遺構6)、竪立2	第125集
		西一本柳遺跡Ⅼ	岩村田宇下樋田	竪穴住(弥生中期13・弥生後期8・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、竪立5	第139集
		西一本柳遺跡ⅭⅣ	岩村田宇上樋田	竪穴住(弥生中期17・後期17・古墳中期3・後期7・奈・平11)、竪立10、土坑16、溝13	第175集
		西一本柳遺跡ⅭⅤ	岩村田宇宮木上	竪穴住(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈・平5)、竪立3、土坑5	第154集
		西一本柳遺跡ⅭⅥ	岩村田宇西一本柳	竪穴住(弥生中期12・後期1・古墳後期4・奈良1)、竪立6、溝3	第160集
		西一本柳遺跡ⅭⅦ	岩村田宇西一本柳	竪穴住(弥生中期1・後期2・奈良2)、溝	第169集
9	寺壇遺跡群	仲田遺跡	猿久保寺仲田	竪穴住(古墳中期4・後期6・奈良10・平安6)、竪立11、土坑6、H15.5リ花弁双雄八花籠	第66集
		北一本柳遺跡Ⅱ	岩村田宇北一本	竪穴住4、土壇墓1、溝2	年報14
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡Ⅲ	岩村田宇北一本	竪穴住(弥生後期48・古墳後期11・中世57)、竪立13、土坑310、溝32	第175集
		北一本柳遺跡Ⅳ	岩村田宇北一本	竪穴住3、溝2	第158集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡Ⅱ	岩村田宇東大門先	竪穴住(古墳後期2・奈良・平安15)、竪立21、土坑9、溝10	第175集
12	野馬窪遺跡群	野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ	猿久保野馬窪	竪穴住1、竪穴状遺構17、竪立13、土坑234	第170集
13	下信濃石遺跡	岩村田宇仁前	寺院園地1、竪穴状遺構10、土坑47 古瀬戸灰釉水甕	第134集	
14	蛇倉古墳	安原寺蛇倉	後期古墳3基、竪穴住3、竪立1	第78集	
15	岩村田遺跡群	観音堂遺跡	岩村田宇観音堂	竪穴住(平安1・中世27)、土坑170、土壇墓4、竪立1	第70集
16	岩村田遺跡群	柳堂遺跡	岩村田宇柳堂	竪穴住(弥生後期2・平安1・中世33)、竪立2、土坑203、周溝溝3、池	第85集
17		大井城址	岩村田宇古城	竪穴住(古墳後期15・中世44)、竪立3、土坑285	
18		下小平遺跡	岩村田宇下小平	竪穴住(弥生後期5・古墳後期1)、方形周溝墓2	
19	寺壇遺跡群	寺壇遺跡	猿久保宇下原	竪穴住(弥生1・平安1)、縄文草創期(爪形文土器・石器)	第40集
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂宇聖原	竪穴住(古墳後期155・奈良平安663)、竪立869、土坑370、溝40	第103集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂宇下芝宮	竪穴住(古墳中期5・後期2・平安2)、竪立6	第9集
22	長土呂遺跡群	下上柳遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂宇下柳	竪穴住(弥生後期4・古墳中期13・後期25・奈良1・平安15)、竪立18	第9集
23	周防畑遺跡群	長土呂	長土呂	竪穴住92(弥生～平安)、竪立9、円形周溝墓15、土坑422	県調査
24	長土呂遺跡群	長土呂城址	長土呂	中世館址	
25	長土呂遺跡群	下伯保遺跡	長土呂宇下伯保	竪穴住(弥生後期末9)、溝址、銅鏃	第110集
26	枇杷坂遺跡群	上直路遺跡	岩村田宇上直路	竪穴住(弥生後期2)、銅網1	年報5
		円正坊遺跡Ⅱ	岩村田宇円正坊	竪穴住(弥生中期2・弥生後期1・古墳後期2・平安2)、竪立1、土坑8	第53集
		円正坊遺跡Ⅲ	岩村田宇円正坊	竪穴住(古墳中期7・後期23・平安4)、方形・円形周溝墓10	第102集
		円正坊遺跡Ⅳ	岩村田宇円正坊	竪穴住37、竪立4、遺構墓1、土坑26	年報15
		円正坊遺跡Ⅴ	岩村田宇円正坊	竪穴住(弥生～平安41)、竪立2、土坑11、溝3、円形周溝墓1	第185集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田宇松の木	竪穴住(弥生～古墳10)、竪立1、土坑1、溝6	第91集
29	鳴沢遺跡群	五里塚遺跡	岩村田宇五里塚	竪穴住(弥生中期43)、周溝墓6、古墳址2、土坑37	第74集
30	大和田遺跡群	川原端遺跡	鳴瀬川川原端	竪穴住(弥生中～後期13・古墳49)、竪立20、土坑22、溝24	第89集
31	宮家遺跡群	宮家遺跡	横和宇宮家	竪穴住13(弥生中期後半・古墳前期)、竪立6、土坑17	第157集
32	周防畑遺跡群	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ他	長土呂宇宮の前	竪穴住350(弥生後期～平安)、竪立112、土坑176、溝68、方形・円形周溝墓	第240集
33	長土呂遺跡群	大豆田遺跡Ⅳ	長土呂	竪穴住26(弥生後期～平安)、竪穴3、竪立33、土坑139、溝76	第229集

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査の方法

遺跡名・調査区

遺跡名は、佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、大豆田遺跡Ⅴと古仁田遺跡Ⅱとした。ローマ数字は調査回数である。調査区を網羅するように、国家座標に沿って40×40mの区画を設定し、北よりローマ数字を付した。この40mの区画は北東隅を起点に4mの各グリットを設定した。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号はアルファベットで以下の決まりに従い付けられている。

- 3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。 N=長土呂 N=根々井
- 3文字の2番目は遺跡群名のローマ字表記の頭文字である。 S=周防畑 K=古仁田
- 3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。 O=大豆田 O=古仁田
- 末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す V 5地点目 II 2地点目

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

- H=住居址（竪穴住居址）
- F=掘立柱建物址 M=溝状遺構
- D=土坑（陥穴、貯蔵穴等） T=特殊遺構
- P=ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

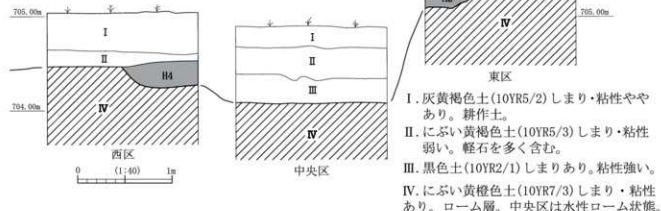
遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を1/40で修正し、仮図版を作成した。遺物は1/1で実測し、1/2で仮図版を作成した。

報告書

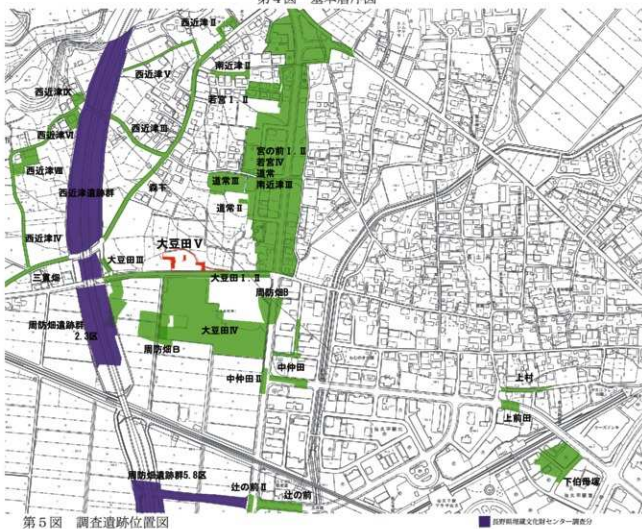
文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第2節 大豆田遺跡Ⅴ基本層序

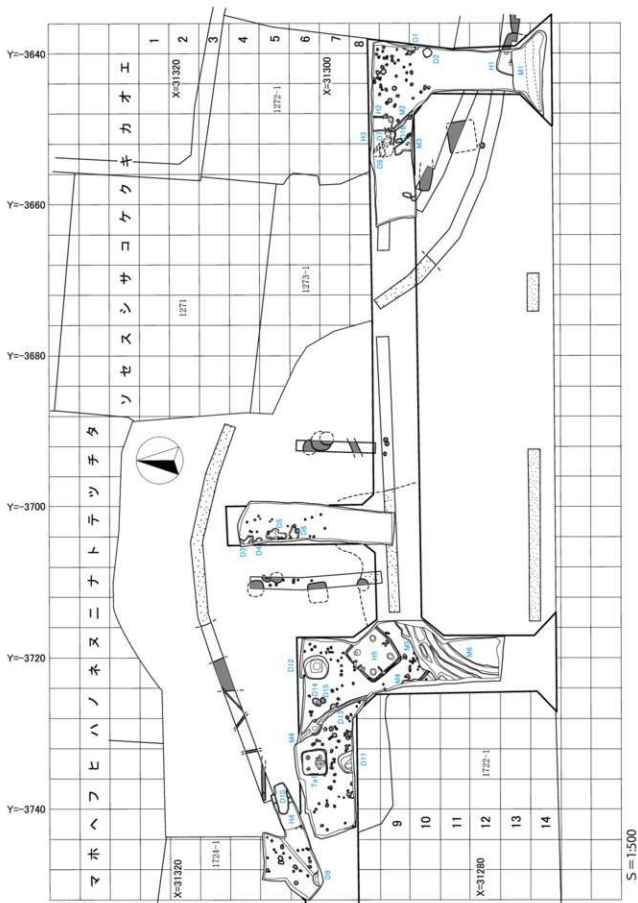
本調査区の土層は基本的に4層に分層され、Ⅳ層がいわゆるP1層で遺構確認面である。東区と西区は耕作土下が遺構確認面となるが、中央区は地形がやや窪んで谷地形となる為に、Ⅲ層の黒色土の堆積が見られた。また、Ⅳ層は水性化したP1層であった。



第4図 基本層序図



第5図 調査遺跡位置図



第6図 大豆田遺跡V調査全体図

第IV章 大豆田遺跡Vの調査

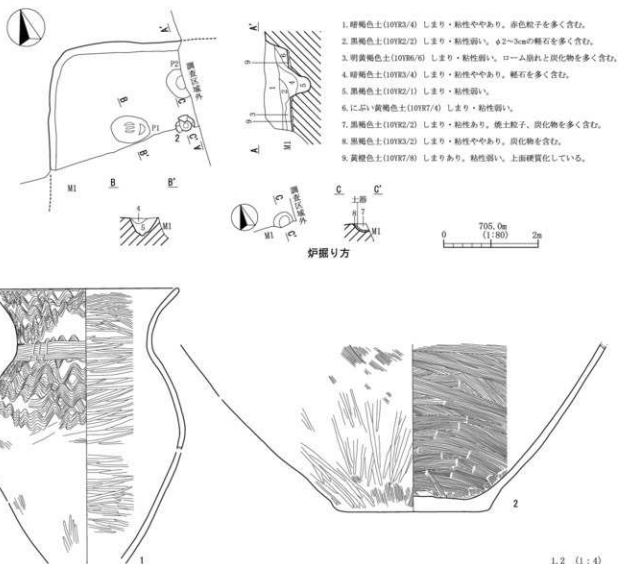
第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址

本址は東側調査区南のウ-13, エ-12・13Grで検出された。南側はM1号溝状遺構に切られており、調査範囲も狭いことから形態は不明である。規模は、検出した部分で南北長2.3m・東西長3.0mで、床面積は検出部で5.54㎡を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北壁で0.47mを測る。床は硬質であった。ピットは2か所確認された。検出位置よりP1は支柱穴、P2は棟持柱と考えられる。規模はP1が径0.82m・深さ0.38m、P2が径0.64m・深さ0.46mを測る。炉は図示した2の壺が埋められた「土器埋設炉」であった。土器内の埋没土には焼土と炭化物が検出された。掘方は円形であった。

本址からの遺物は覆土を中心に出土し、2点を図示した。1は甕であり、底部を欠損する。覆土中からの出土である。2は壺の胴部下半で、炉の埋設土器として使われていた。残存部での赤彩は確認できなかった。

これらの出土遺物から、本址は弥生後期に位置づけられると考える。



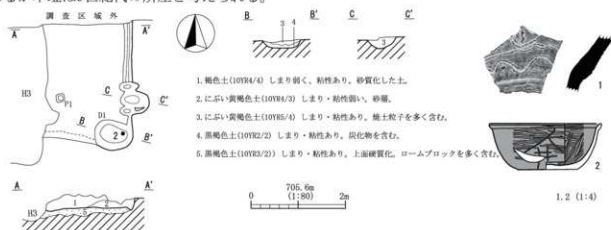
第7図 H1号住居址及び出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は東側調査区中央のカー-8・9Grで検出された。北側は調査区域外となり、西側はH3号住居址により削平され、形態は不明である。規模は残存部分で南北長2.47m・東西長1.596mである。床面積は検出部分で3.74㎡を測る。壁は緩やかに立ち上がり、深さは東側で最大0.16mを測る。床は部分的に硬質であり、全体に貼床が施されていた。ピットは一ヶ所確認された。P1の規模は径0.17m・深さ0.15mを測る。

カマドは東壁南よりで検出された。顕著な粘土や構築礫は検出されなかったが、火床部と考えられる部分から焼土が検出されたことからカマドと判断した。また、カマド脇には灰溜めのような楕円形の土坑が検出された。深さは0.15mを測り、焼土や炭化物を含んでいた。

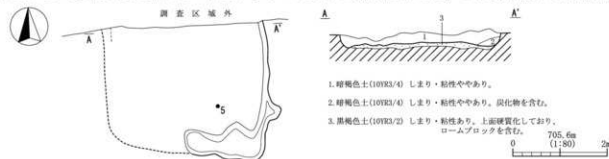
本址からの出土遺物は少量であったが、2点を図示した。1は須恵器甕の頸部付近と考えられる破片である。生焼けのような褐色を呈する。施文はヘラにより波状の沈線が描かれている。2は土師器坏でカマド脇の土坑内より出土した。内外面に黒色処理が施され、体部外面に「大井」の刻書が確認できる。刻書は焼成前に施されたと考えられる。これらの出土遺物から、不確実ではあるが本址は9世紀代の所産と考えられる。



第8図 H2号住居址及び出土遺物実測図

(3) H3号住居址

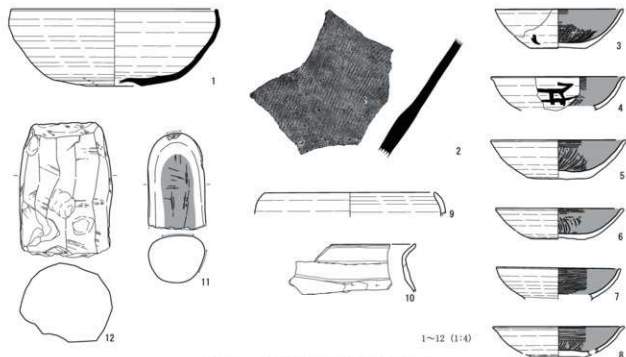
本址は東側調査区中央よりのカー-8・9、キ-8・9Grで検出された。形態は方形と考えられるが北側が調査区外となる。また、住居址南西側は壁等は削平されており、硬質の床が住居跡範囲として確認できた。規模は、東西長が3.15m、南北長は検出値で2.77mを測る。床面積は硬質部分で5.89㎡を測る。ピットは検出されなかった。カマドはH2号住居址と同じく、東壁南よりで検出された。カマドには顕著な粘土や構築礫は確認出来なかったが、わずかな焼土と炭化物及びカマド支脚石の出土からカマドと判断した。また、カマド掘方につながるように土坑状の掘り込みが確認された。規模は長軸1.70m・短軸0.43mで、深さは0.06mを測る。底面はほぼ平坦であった。本址からの遺物は覆土中からの出土が多かったが、12点を図示した。1は須恵器鉢で、器形は



第9図 H3号住居址実測図

かなり歪んだ状態である。2は須恵器甕の胴部下半の破片である。3～8は土師器坏である。いずれも内面に黒色処理が施されている。また、3は墨痕、4は墨書が確認できるが、判読はできない。9は土師器鉢の口縁部の破片である。同一個体と考えられる体部破片も出土しているが接合できなかった。10はいわゆる武蔵甕の口縁部破片である。11は敲きと磨りが確認できる礫で、欠損している。12は軽石製のカマド支脚石で、顕著な被熱を受けている。カマド前面の床面上から出土した。

これらの出土遺物から本址は9世紀代に位置づけられると考える。

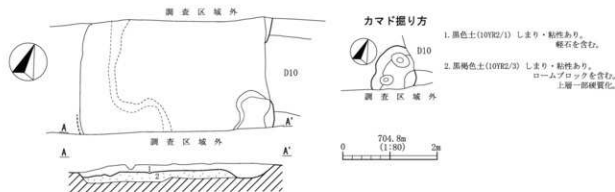


第10図 H3号住居址出土遺物実測図

(4) H4号住居址

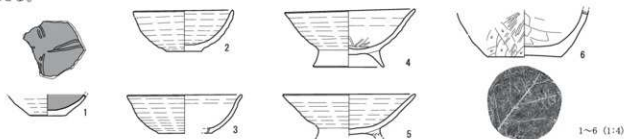
本址は西側調査区西よりのフ-5・6、へ-5・6Grで検出された。形態は方形と考えられるが北側と南側が調査区域外となり、詳細は不明である。また、住居址西側は壁等は削平されており、硬質の床と住居址掘方の範囲で住居範囲として確認した。規模は、東西長が3.92m、南北長は検出値で2.34mを測る。床面積は検出部分で9.136㎡を測る。床は硬質で、掘方は西壁際が一段深く掘り込まれていた。ピットは検出されなかった。カマドは東壁南よりで検出された。カマドには顕著な粘土や構築礫は確認出来なかったが、わずかな焼土と炭化物からカマドと判断した。

本址からの遺物は殆どが覆土中からの出土であり、小片が多かった。6点を図示した。1～3

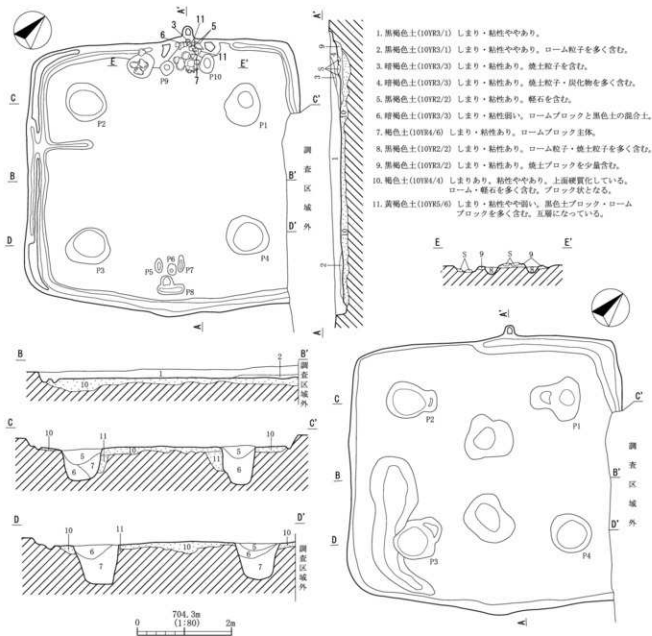


第11図 H4号住居址実測図

は土師器坏である。1は内面黒色処理がされている。4と5は土師器碗である。6は土師器小型甕で、底部に木葉痕が確認できる。これらの出土遺物から本址は10世紀代に位置づけられると考える。



第12図 H4号住居址出土遺物実測図



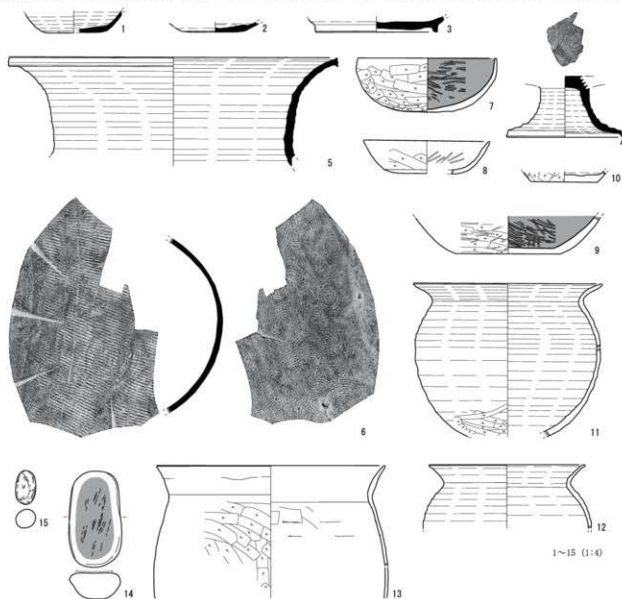
第13図 H5号住居址実測図

(5) H5号住居址

本址は西側調査区中央のヌー7・8・9、ネー8・9Grで検出された。形態は方形で、規模は、長軸5.23m・短軸1.7mを測る。床面積は25.8㎡を測る。壁深さは北コーナーで最大0.24mを測る。住居の主軸方位はN-41°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは掘方も含め10か所で検出された。検出位置より、P1~P4が主柱穴、P5~P8が入口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はP1が径0.91m・深さ0.78m、P2が径0.90m・深さ0.74m、P3が径0.93m・深さ0.80m、P4が径0.93m・深さ0.81m、P5が径0.32m・深さ0.07m、P6が径0.25m・深さ0.15m、P7が径0.36m・深さ0.08m、P8が径0.58m・深さ0.11m、P9が径0.34m・深さ0.18m、P10が径0.42m・深さ0.15mを測る。壁溝は検出部分全体に巡り、南西壁側は二重に巡っていた。住居址掘方はほぼ平坦であったが、南コーナー付近だけ一段深く掘り下げられていた。

カマドは北西壁中央部に構築されており、袖部は残存していなかったが、構築材と考えられる軽石や須恵器甕片が火床部付近からまともに出て出土した。火床部の顕著な焼けは確認できなかった。

本址からの出土遺物は覆土やカマド周辺部からまともに出て出土した。1と2は須恵器坏、3は須恵器有台坏の底部である。見込み部に自然釉が掛かる。4は須恵器高皿脚部で、坏部見込み部



第14図 H5号住居址出土遺物実測図

には当具痕がある。6は須恵器横瓶の破片と考えられる。7と8は土師器坏である。7は内面黒色処理が施されている。9は土師器鉢と考えられ、内面黒色処理が施されている。10～13は土師器甕である。11と12は同形のロクロ甕で、器厚は薄くつくられている。13はいわゆる武蔵甕とよばれる甕である。14と15は磨き石で、特に15は全体によく磨かれている。本址は、これらからの出土遺物から8世紀代に位置づけられると考える。

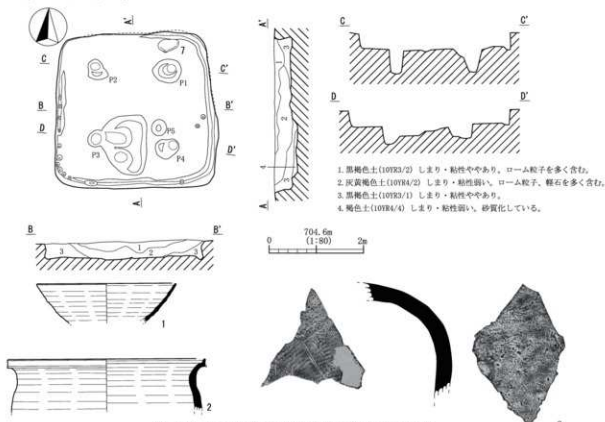
第2節 竪穴状遺構

(1) Ta1号竪穴状遺構

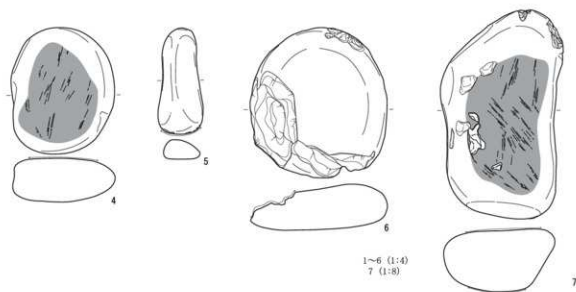
本址は西側調査区中央のヒ-6・7、フ-6・7Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長3.06m・東西長3.02mである。遺構の長軸方位はN-3°-W、床面積は9.16㎡を測る。壁は内湾気味に立ち上がり、壁高は南西コーナー部で0.35mを測る。壁際には北西及び南西コーナーを除き壁溝が巡り、壁溝内には径0.09～0.12m・深さ0.04～0.11mを測るピットが検出された。ピットは5か所で検出された。規模はP1が径0.61m・深さ0.48m、P2が径0.45m・深さ0.51m、P3が径0.27m・深さ0.38m、P4が径0.51m・深さ0.29m、P5が径0.34m・深さ0.19mを測る。P1～P4は検出位置より主柱穴と考えられる。床は軟質で、いわゆる粘床的な土層は確認できなかった。カマドは確認できなかった。

本址からの出土遺物は少なく、7点を図示した。1は須恵器坏、2と3は須恵器甕である。3は外面に窯体のような不純物が付着している。4は磨り石、5と6は叩き石である。7は本址の北東コーナー壁に接し、床より少し浮いた状態で出土した。表面の中央は磨れて摩耗が激しく、摩耗周辺は黒く焦げたような煤が付着している。

本址は調査当初にカマドの有無によって中世の竪穴状遺構と判断して「Ta」記号を付し調査を行ったが、出土遺物には中世所産を示す物は無く、いずれも古代の範疇でとらえられるものであった。よって本址の帰属時期は古代と考えられ、用途は7の台石出土を考えると作業小屋的な建物址と考えられようか。



第15図 Ta1号竪穴状遺構及び出土遺物実測図



第16図 Ta 1号竪穴状遺構出土遺物実測図(2)

第3節 土坑

(1) D 1号土坑

本址は東側調査区東端のウー9・10Grで検出された。東側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は、南北の長軸が1.88m・短軸が東西で0.20mである。壁高さは最大0.39mを測る。本址からの出土遺物は内面黒色処理の土師器坏片が1点出土したのみである。

(2) D 2号土坑

本址は東側調査区東端のウー10Grで検出された。形態は円形で、壁がやや内湾する。規模は、長軸が1.20m・短軸が1.06mである。深さは最大で0.36mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は無かった。

(3) D 3号土坑

本址は中央調査区北端のテ・トー4Grで検出された。北西側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は、検出部分の長軸が1.36m・短軸が0.52mである。深さは0.63mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(4) D 4号土坑

本址は中央調査区北側のトー4・5Grで検出された。東側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は、南北の長軸が1.30m・短軸が検出部で0.28mである。深さは0.15mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(5) D 5号土坑

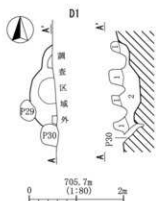
本址は中央調査区北側のテ・トー5Grで検出された。形態は不整形で、規模は、南北の長軸が2.72m・短軸が東西で0.62mである。深さは0.29mを測る。本址からの出土遺物は同一個体と考えられる土師器坏片が4点出土したのみである。

(6) D 6号土坑

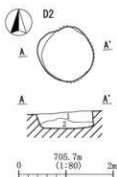
本址は中央調査区西側のトー6・7Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸が1.78m・短軸が東西で0.52mである。深さは0.26mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(7) D 7号土坑

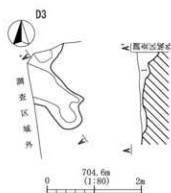
本址は東側調査区西端のカ・キー9Grで検出された。H2・3号住居址より本址の方が古い。形態は不整形で、規模は長軸が2.68m・短軸が0.62mである。深さは0.36mを測る。本址からの出土遺物は図示した6点があり、1は須恵器坏、2と3はいずれも内面黒色処理された土師器坏で、2は体部外面に「好」と考えられる墨書が確認できる。4は土師器碗、5と6は土師器甕である。



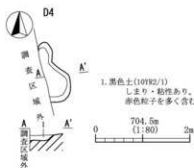
1. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり。
2. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。
黒色土ブロックを多く含む。



1. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い、炭化物を多く含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性ややあり、黒色土ブロックを含む。



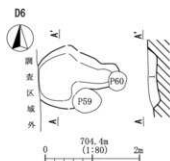
1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、赤色粒子を多く含む。



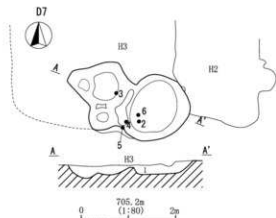
1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、赤色粒子を多く含む。



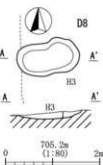
1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、赤色粒子を多く含む。



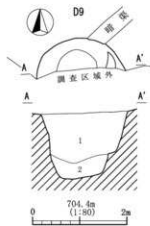
1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、赤色粒子を多く含む。



1. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり、軽石を含む。



1. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性あり、ロームブロックを含む。

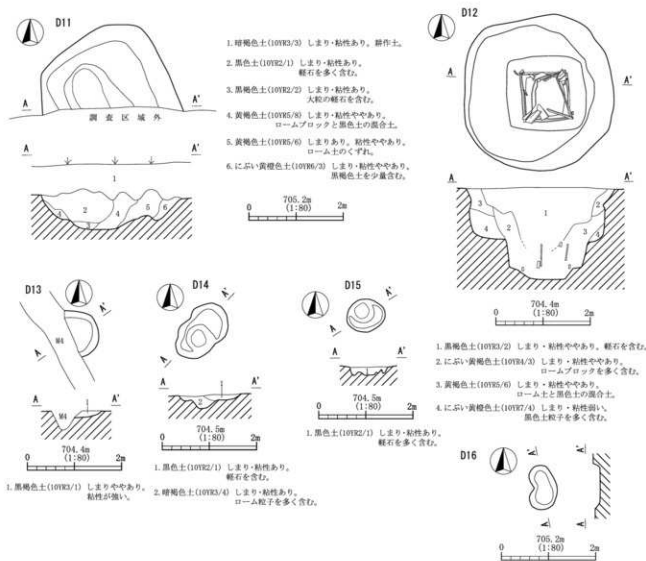


1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、ロームブロックが扇状に堆積している。
2. 黄褐色土(10YR7/3) ローム層が崩れ、しまり弱く、粘性ややあり。



1. 黄褐色土(10YR4/3) しまりややあり、粘性あり、耕作土に近い。

第17図 D1～10号土坑実測図



第18図 D11～16号土坑実測図

(8) D8号土坑

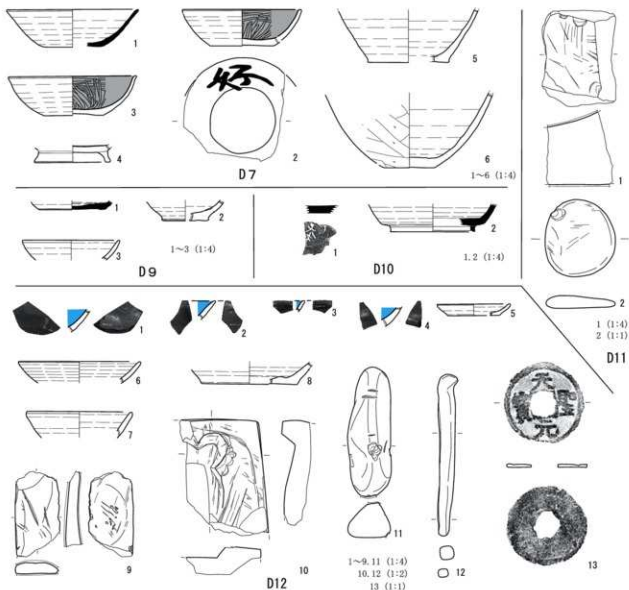
本址は東側調査区西端のキー8・9Grで検出された。H3号住居と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は楕円形で、規模は、長軸1.32m・短軸0.68mである。深さは最大0.16mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(9) D9号土坑

本址は西側調査区西端のマー6Grで検出された。南側は調査区域外となるが、形態は円形と考えられる。規模は径1.81mである。深さは最大で1.39mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は碎片となった土師器や須恵器があり、3点を図示した。1は須恵器の底部である。2と3は土師器の底部と口縁部で、いずれも口径が小型のものである。

(10) D10号土坑

本址は西側調査区北側のフ・ヘー5Grで検出された。北東側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は、検出部分の長軸が3.98mで、短軸が1.30mである。深さは0.19mを測る。本址からの出土遺物は少なかったが2点を図示した。1は須恵器底部の破片で、底部外面に焼成前の刻書で「大」と「十」のあわせ文字が確認できる。2は須恵器有台である。



第19図 D7・9・10・11・12号土坑出土遺物実測図

(11) D11号土坑

本址は西側調査区南よりのヒー7・8Grで検出された。南側が調査区域外となり、形態は不明である。規模は、長軸2.67m・検出部短軸1.50mである。深さは最大0.70mを測る。本址は覆土4層にみられるように、下部ローム層が巻き上がった状態の堆積を示し、或いは風倒木痕の可能性がある。本址からの出土遺物は、図示した2点の石製品があった。1は砥石と考えられるが、両端を欠損している。2は薄い磨かれた礫で、基石として使用した可能性がある。

(12) D12号土坑

本址は西側調査区中央のヌ・ネ6・7Grで検出された。形態は上部が円形で下部は方形である。井戸としての使用が考えられ、上部は掘方分も掘っている為、使用時の形状は方形であったと考えられる。規模は径3.31mである。深さは最大で1.95mを測る。覆土は自然堆積であった。下部からは井戸枠に使用された木材が一部組まれた状態で出土した(写真図版参照)。

本址からの出土遺物は13点を図示した。1～4は青磁碗片、5～7はカワラケである。8は土師器甕底部である。9は砥石、10は硯の欠損品で、一部に海・陸が残存する。13は北宋銭で摩耗が激しい。

(13) D13号土坑

本址は西側調査区中央のノー7Grで検出された。M4号溝状遺構に西半分を削平されている。形態は円形で、規模は検出長0.93mで、深さは最大0.10mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(14) D14号土坑

本址は西側調査区中央のノー6・7Grで検出された。形態は楕円形で、中央部が一段深くになっている。規模は長軸1.34m・短軸0.78mである。深さは最大で0.32mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(15) D15号土坑

本址は西側調査区中央のノー7Grで検出された。形態は円型、規模は径0.74m、深さは0.20mを測る。本址からの出土遺物は土師器坏片と須恵器坏片が各1点出土した。

(16) D16号土坑

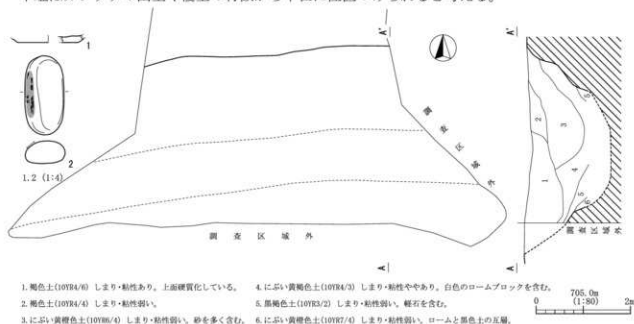
本址は東側調査区西よりのカー9Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸0.94m・短軸0.50mである。深さは0.17mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

第4節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構

本址は東側調査区東端のウ・エ・オー13・14Grで検出された。南側及び東西が調査区域外となる為全容は不明である。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で推定幅4.40m。深さは湧水の為に完掘りは行わなかったが、一部分のトレンチで推定1.64mを測る。堆積は自然堆積で、1層の上には硬質化がみられ道としての使用も考えられる。本址からの出土遺物は図示したカワラケ片と磨り石があった。

本址はカワラケの出土や覆土の特徴から中世に位置づけられると考える。



第20図 M1号溝状遺構及び出土遺物実測図

(2) M2号溝状遺構

本址は東側調査区西端のオ・カ・キー9、キー8Grで検出された。北西より南東に調査区を横切るように検出された。溝の断面形態は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は最大長7.51m、幅0.30～0.59mで深さは0.09～0.18mを測る。溝は北西方向に0.15m程低くなり、地形に添うように伸びていると考えられるが調査区南側では検出されなかった。

本址からの出土遺物は須恵器坏片2点があり、遺構の新旧関係からも所産は古代と考えられる。

(3) M3号溝状遺構

本址は東側調査区西よりのカ・キー9・10Grで検出された。南側が調査区域外となる為全容は不明である。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で長さ2.56m・幅1.10~2.04mを測る。北側は遺構の始まりなのか、地形による影響か不明であり、溝深さは0.05~0.20mを測る。溝底面は凹凸が激しかった。本址からの出土遺物はなかった。

(4) M4号溝状遺構

本址は西側調査区中央のネー10、ノー8、ノ・ハー7、ハー6Grで検出された。北より南に調査区を横切るように検出された。溝の断面形態は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部で最大長19.52m、幅0.26~1.76mで、深さは0.26~1.76mを測る。溝は南東方向に0.21m程低くなり、地形に添うように伸びている。また、北側よりでは溝内いわゆる集水機能を持つような土坑状の掘り込みが検出されている。形態は円型で、深さは0.97mを測る。

本址からの出土遺物は図示した2点がある。1は常滑系のすり鉢である。2は尾張系のこね鉢で内面が磨れている。

(5) M5号溝状遺構

本址は西側調査区南端のニ・ヌー9、ニ・ヌ・ネー10、ヌ・ネー11、ネー12Grで検出された。北東方向から南西方向に向けて検出された。形態は逆台形を呈するが、一部溝底に深い土坑状の掘り込みや島状の高まりが存在する。検出された溝長さは10.35mで、幅は2.28~3.48m、深さは0.28~0.59mを測る。

本址からの出土遺物は5点を図示した。1は常滑系のすり鉢口縁部である。2は砥石で砥面数は2面あり、よく使用され凹化している。3は磨石、4と5は叩き痕と磨り痕がある石製品である。

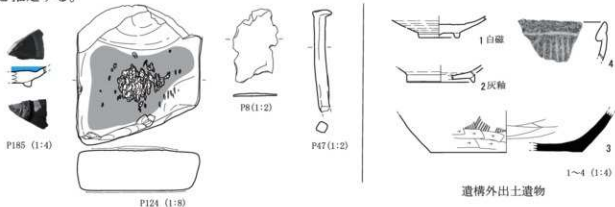
(6) M6号溝状遺構

本址は西側調査区南側のヌー10、ヌ・ネー11、ネー12Grで検出された。M5号溝状遺構と並走するように検出された。南に接する大豆田遺跡IVにおいても同様な溝状遺構が調査されており、M5号溝状遺構とM6号溝状遺構は掘削時に同一遺構か或いは掘り直しの可能性が指摘できる。形態は逆台形で、底面はほぼ平坦であった。規模は検出された長さは10.48mで、幅は0.84~1.21m、深さは0.22~0.39mを測る。

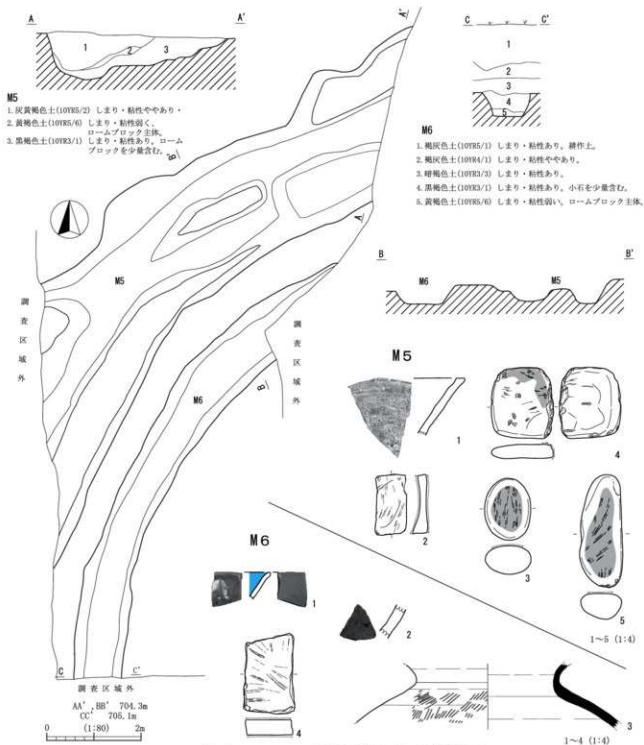
本址からの出土遺物は4点を図示した。1は青磁碗で連弁文が施されている。2は尾張系のこね鉢破片と考えられる。3は須恵器甕、4はやや石材が荒いが砥石と考えられる。

第6節 単独ピット

本遺跡からは計204個の単独ピットが調査された。いずれも規模は小型で柱痕が観察できるものはなかった。各ピットの帰属時期は確定が困難であるが、東側調査区オー9Gr付近のピットからは近世陶磁器の出土や覆土の状況から近世以降の所産が考えられる。また、西側調査区のピットは方形で青磁等の出土から中世の所産と考えられ、ピット周辺の井戸址や溝状遺構と同時代の帰属と推定する。



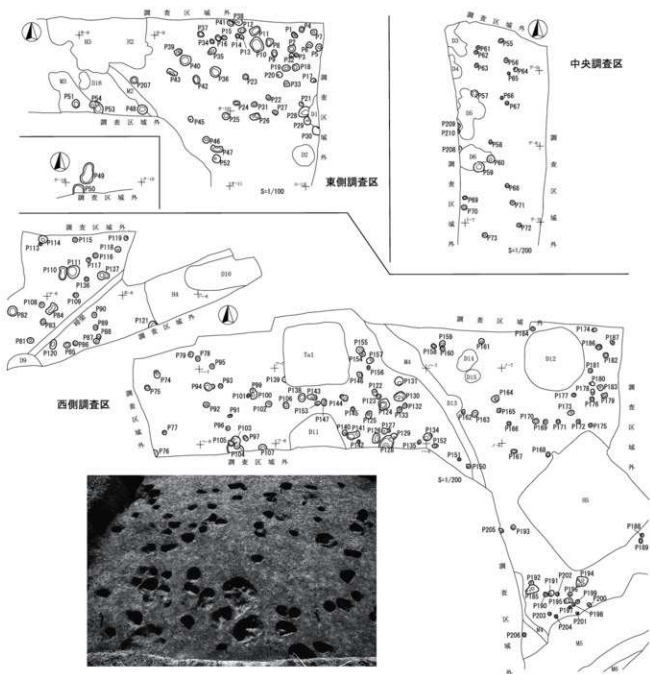
第22図 単独ピット及び遺構外出土遺物実測図



第23図 M5・6号溝状遺構及び出土遺物実測図

第V章 調査の成果

今回の調査は761㎡という周辺部の調査事例に比べると極限られた範囲での発掘調査となった。しかし、西側の中部横断自動車道、東側の近津区画整理事業、南側の佐久平浅間小学校建設等の発掘調査成果を繋ぐうえで貴重な調査事例となった。以下それらを列記して調査の成果としたい。まず、弥生時代後期についてである。今回、中世の溝状遺構に削平されているが、弥生後期箱



第24図 単独ピット実測図

清水期の堅穴住居址が1軒検出された。これにより佐久平浅間小学校側で発見された弥生後期集落の広がりや推定出来るようになった。南側では東西二つの集落が検出されているが、今回の調査事例を加えると、東側集落は北へ広がり、西側集落は北に広がらない事が予想でき、20軒前後の集落であったと考えられる。

次に中世に帰属する溝状遺構や井戸跡の発見が挙げられる。佐久平浅間小学校側でも同時代の遺構が発見されており、特にM5・6号溝状遺構は学校側で発見されている溝と繋がる可能性が大きく、尚且つ溝が東側に屈曲することが指摘できた。また、D12号土坑は井戸址と考えられ、形態や井戸柱の残存状況などが学校側で調査された井戸と酷似する。この事から、本遺跡の中世遺構は同一時期と考えられ、13~14世紀代の所産と考えられる。佐久地域において発見例の少ない当該時期の遺構が集まるこの地域は、今後益々注目がなされる場所であろう。以上雑談ではあるがまとめとしたい。

第3表 ビット計測表(2)

()推定 ()残存 ()推定 ()

遺構名	出土位置	長さ	幅	高さ	形	部	出土遺物	備	考	遺構名	出土位置	長さ	幅	高さ	形	部	出土遺物	備	考
F163	ノ7	36.0	34.0	23.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F187	※-6	23.0	20.0	8.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F164	ノ7	40.0	35.0	22.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F188	※-9	18.0	17.0	26.0	円形	養生鉢	焼灰土(G09K4/1)		
F165	ノ7	23.0	21.3	42.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F189	※-9	21.0	20.0	10.9	方形		焼灰土(G09K4/1)		
F166	※-7	18.0	17.5	23.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F190	※-9+10	24.5	22.5	20.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F167	※-8	31.0	18.0	17.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F191	※-9+10	36.0	33.0	49.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F168	※-8	26.0	21.0	32.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F192	※-9	24.0	23.0	22.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F169	※-7	21.5	19.0	37.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F193	※-9	27.0	24.0	15.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F170	※-7	25.0	27.0	9.0	円形	養生盤	焼灰土(G09K4/1)			F194	※+ネ-9	68.0	52.0	47.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F171	※-7	22.0	21.0	17.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F195	※-10	22.0	22.0	32.0	不整形		焼灰土(G09K4/1)		
F172	※+ネ-7	25.0	21.0	30.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F196	※-9+10	68.0	62.0	32.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F173	※-7	34.0	34.0	32.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F197	※-10	17.0	12.0	11.0	方形		焼灰土(G09K4/1)		
F174	※-6	25.0	21.0	20.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F198	※-10	15.5	14.5	13.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F175	※-7	21.0	21.0	14.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F199	※+ネ-10	20.5	20.0	16.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F176	※-7	27.0	26.0	8.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F200	※-10	22.0	18.0	23.0	方形		焼灰土(G09K4/1)		
F177	※-7	22.0	18.0	37.0	円形	笠倉跡壁?	焼灰土(G09K4/1)			F201	※-10	14.0	12.0	12.0	方形		焼灰土(G09K4/1)		
F178	※-7	32.0	26.0	37.0	円形	養生皿	焼灰土(G09K4/1)			F202	※-9+10	18.0	18.0	18.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F179	※-7	32.0	23.5	9.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F203	※-10	18.0	15.0	11.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F180	※-7	36.0	15.0	21.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F204	※-10	31.0	20.0	11.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F181	※-6	26.0	22.5	27.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F205	※+ノ7	224.0	22.0	19.0	-		焼灰土(G09K4/1)		
F182	※-6	25.0	25.0	46.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F206	※-10	20.0	18.0	13.0	円形		焼灰土(G09K4/1)		
F183	※-7	32.0	30.0	32.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F207	※+9	40.0	37.0	16.0	円形		赤褐色土(G09K3/1)		
F184	※-6	22.0	23.0	17.0	方形		焼灰土(G09K4/1)			F208	3-6	34.0	(14.0)	16.0	-		赤褐色土(G09K3/1)		
F185	※-9	32.0	33.0	36.0	不整形	青磁碗	焼灰土(G09K4/1)			F209	3-8	30.0	(14.0)	16.0	-		赤褐色土(G09K3/1)		
F186	※-6	30.0	26.0	23.0	円形		焼灰土(G09K4/1)			F210	3-8	17.5	(10.0)	15.0	-		赤褐色土(G09K3/1)		

第4表 出土遺物観察表

H1	種別	材質	法 量			内 面		外 面		備 考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	口 内	底 内	口 外	底 外		
1	養生	漆	19.8	-	(29.2)	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ヘラミガキ 磨耗痕跡文 3段の磨耗痕跡文(逆止め)6本	完全実測			
2	養生	漆	-	16.3	(17.8)	ハケ目	ハケ目→ヘラミガキ	完全実測			
H2	種別	材質	法 量			内 面		外 面		備 考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	口 内	底 内	口 外	底 外		
1	灰皿器	漆	-	-	-	ロタロナダ	ロタロナダ	ヘラ磨痕跡文	新出実測	D1	
2	土師器	灰	11.9	6.3	5.0	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理 刷毛「大井」磨成前 底面右回転糸切り	完全実測			D1
H3	種別	材質	法 量			内 面		外 面		備 考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	口 内	底 内	口 外	底 外		
1	灰皿器	鉄	(22.4)	(5.8)	8.2	ロタロナダ	ロタロナダ→底面糸切り 底面外周回転ヘラケズリ	回転実測			
2	灰皿器	漆	-	-	-	ロタロナダ	タタキメ 自然磨付着	新出実測			
3	土師器	灰	(13.4)	6.2	4.2	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ→底面右回転糸切り	完全実測			磨痕あり
4	土師器	灰	(14.2)	-	(3.6)	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ	完全実測			磨痕あり D7
5	土師器	灰	14.3	6.5	4.2	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ→底面右回転糸切り	完全実測			D7
6	土師器	灰	(13.5)	5.8	3.3	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ→底面右回転糸切り	完全実測			
7	土師器	灰	(13.2)	-	(3.4)	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ	回転実測			
8	土師器	灰	(13.9)	5.8	3.4	ミガキ 黒色処理	ロタロナダ→底面右回転糸切り	完全実測			
9	土師器	鉄	(18.1)	-	(2.6)	ロタロナダ	ロタロナダ	回転実測			
10	土師器	漆	-	-	-	口縁ロタロナダ→胴部ヘラケズリ	口縁ロタロナダ→胴部ヘラケズリ	破片実測			
No.	器 種	素 材	器大長	器大幅	器大厚	重 量	備 考		出 土 位 置		
11	磨・磁石	石	(10.3)	(8.2)	(5.0)	(591.32)	下縁部欠損	上縁部に磨打痕	サラ2面		
12	カマド支脚石	石	14.3	9.8	8.4	400.71	破損あり	一部黒色酸化			
H4	種別	材質	法 量			内 面		外 面		備 考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	口 内	底 内	口 外	底 外		
1	土師器	灰	-	(4.0)	(2.3)	漆 黒色処理	ロタロナダ→回転糸切り	回転実測			
2	土師器	灰	(10.7)	3.7	4.4	ロタロナダ	ロタロナダ→右回転糸切り	完全実測			
3	土師器	灰	(12.2)	(5.4)	4.1	ロタロナダ	ロタロナダ→回転糸切り すず付着	回転実測			
4	土師器	陶	13.9	7.3	6.0	ロタロナダ→ヘラミガキ	ロタロナダ→回転糸切り→高台磨付	完全実測			
5	土師器	陶	(14.1)	-	(4.3)	ロタロナダ	ロタロナダ→回転糸切り→高台磨付	完全実測			
6	土師器	漆	-	7.8	(3.0)	ヘラケズリ	ヘラケズリ→ヘラミガキ 底面に木葉痕	完全実測			

第5表 出土遺物観察表(2)

H5	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	須恵器	杯	-	(7.0)	(2.4)	ロクロナダ	ロクロナダ	底面回転ヘラケズリ	回転実施	Ⅱ区	
2	須恵器	杯	-	6.9	(1.1)	ロクロナダ	ロクロナダ		完全実施	Ⅱ区	Ⅱ区ホリ
3	須恵器	有台杯	-	(12.4)	(1.7)	ロクロナダ 付着物あり	ロクロナダ	底面回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実施		
4	須恵器	高杯	-	(12.2)	(6.5)	外周 同心円文の当て具痕 割取,ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施	Ⅱ区	
5	須恵器	壺	(24.4)	-	(11.4)	ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施		カマド
6	須恵器	瓶瓶	-	-	-	同心円文の当て具痕	平行タタキ		新面実施	Ⅱ区	Ⅱ区
7	土師器	杯	14.5	5.6	5.8	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ		完全実施		
8	土師器	杯	(13.4)	(9.0)	3.5	ヘラミガキ 磨耗	ヘラケズリ 磨耗		回転実施	PI Ⅱ区	
9	土師器	鉢?	-	(11.4)	(4.0)	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ→ヘラミガキ		回転実施	Ⅰ区	Ⅳ区ホリ
10	土師器	壺	-	(7.0)	(1.2)	ロクロナダ	ヘラケズリ		回転実施	Ⅰ区	
11	土師器	壺	(20.0)	-	(18.3)	ロクロナダ	ロクロナダ	胴部下半手持ちヘラケズリ	回転実施	Ⅰ区	
12	土師器	壺	(16.4)	-	(8.8)	ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施		ケン1区
13	土師器	壺	(24.2)	-	(14.1)	ヘラナダ ナダ	ヘラケズリ		回転実施	Ⅰ区	Ⅱ区
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
14	磨石	石	10.2	5.6	2.8	275.73	ナギ1面			Ⅰ区	
15	磨石	石	3.6	2.1	2.0	21.70	全弾にナギ				
Ta1	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	須恵器	杯	(14.8)	-	(4.2)	ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施	Ⅰ区	
2	須恵器	壺	(21.0)	-	(5.6)	ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施	Ⅱ区	
3	須恵器	壺	-	-	-	ナダ	平行タタキ		新面実施	Ⅱ区	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
4	磨石	石	13.4	11.0	4.7	1193.64	ナギ1面			Ⅱ区	
5	磨石	石	11.3	4.9	2.3	156.51	隅部に磨行痕			Ⅳ区	
6	磨石	石	16.0	14.1	4.6	1506.60	被熱あり 全体に黒色化 縁部に磨行痕				
7	磨石	石	44.3	26.6	14.0	25.8kg	被熱ありラ→一底黒色化、使用2回 磨痕あり				
D7	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	須恵器	杯	(14.0)	(8.6)	(4.0)	ロクロナダ	ロクロナダ	底面回転糸切り	回転実施		
2	土師器	杯	(12.4)	6.9	(3.9)	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナダ	器底 底面右回転糸切り	完全実施		
3	土師器	杯	13.6	6.3	4.2	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナダ	底面右回転糸切り	完全実施		
4	土師器	瓶	-	8.1	(1.8)	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナダ	底面回転糸切り→高台貼付	完全実施		
5	土師器	壺	-	(8.4)	(5.6)	ロクロナダ	ロクロナダ	底面右回転糸切り	回転実施		
6	土師器	壺	-	5.3	(8.6)	ロクロナダ	ヘラケズリ	條筋及び底面ヘラケズリ	完全実施		
D9	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	須恵器	杯	-	(7.2)	(1.0)	ロクロナダ	ロクロナダ	底部糸切り	回転実施		
2	土師器	杯	-	(5.4)	(2.2)	ロクロナダ	ロクロナダ	底面糸切り	回転実施		
3	土師器	杯	(10.4)	-	(2.1)	ロクロナダ	ロクロナダ		回転実施		
D10	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	須恵器	杯	-	-	-	磨耗	ヘラケズリ	底面に刻書あり	新面実施		
2	須恵器	有台杯	-	(9.4)	(3.6)	ロクロナダ	ロクロナダ	→高台貼付	回転実施		
D11	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考			出土位置	
1	砥石	石	(10.2)	(7.9)	(8.1)	(1047.37)	磨面欠損 砥石数2				
2	磨石	石	2.1	1.9	0.35	2.41					
D12	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()/残存率()/丸底●	
			口徑(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面	外面	備考	出土位置		
1	青磁	碗	-	-	-	ロクロナダ→面花文→施釉	ロクロナダ	→施釉	同安系	12C集平	

第6表 出土遺物観察表(3)

D12	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
2	青磁	碗	-	-	-	ロタロナデ			ロタロナデ→輪軸	鏡泉系 13C	
3	青磁	碗	-	-	-	ロタロナデ			ロタロナデ→輪軸	鏡泉系 13C	
4	青磁	碗	-	-	-	ロタロナデ			ロタロナデ→輪軸	鏡泉系 13C	
5	土師質	かわらけ	(7.4)	(6.4)	1.2	ロタロナデ			ロタロナデ→底面未切り	回転実測	
6	土師質	かわらけ	(13.6)	-	(2.3)	ロタロナデ			ロタロナデ	回転実測	
7	土師質	かわらけ	(11.3)	-	(2.8)	ロタロナデ			ロタロナデ	回転実測	
8	土師器	壺		(10.0)	(2.4)	ロタロナデ			ロタロナデ→底面未切り	回転実測 磨耗	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置
9	磁石	石	(9.0)	(4.7)	(1.6)	(38.72)	両面欠損 断面数2 条痕・刺突痕あり				
10	磁石	石	(6.2)	(4.8)	(1.5)	(39.26)	裏面欠損				
11	磁石	石	13.7	4.7	3.9	321.33	断面と稜上に磨行痕・条痕あり				
12	角釘	鉄	8.6	1.0	0.8	12.01	先端欠損か				
13	古銭	銅	2.1	-	0.1	1.74	天監玄寶(023) 磨耗				
M1	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
1	土師質	かわらけ	-	(6.4)	(0.8)	ナデ			ナデ 底面回転ヘラケズリ	回転実測	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置
2	磁石	石	8.4	4.2	2.5	144.38	ナリ1面				
M4	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
1	常滑	ナリ鉢	-	(14.4)	(6.9)	ナデ			ヘラナデ	13C後半	
2	尾張系	こね鉢	-	-	(5.2)	ナデ			回転ヘラケズリ 高台欠損	13C	
M5	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
1	常滑	こね鉢	-	-	-	ナデ			ヘラナデ	新出実測	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置
2	磁石	石	6.5	3.4	1.4	31.76	断面数2				
3	磨石	石	6.6	4.8	3.0	149.73	ナリ1面				
4	磨・磁石	石	7.6	6.5	1.7	131.12	ナリ1面 断面に磨行痕 正面に条痕				
5	磨・磁石	石	11.9	4.5	2.8	240.08	ナリ1面 断面に磨行痕				
M6	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
1	青磁	碗	-	-	-	ロタロナデ			ロタロナデ 蓮弁文	鏡泉系 13C	
2	尾張系	こね鉢	-	-	-	ナデ			回転ヘラケズリ	新出実測	
3	真直器	壺	-	-	(7.0)	ロタロナデ			ロタロナデ 平行タタキ	回転実測	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置
4	磁石	石	8.5	5.5	1.7	170.72	断面数2				
MP	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
P185	青磁	碗	-	-	-	ロタロナデ→輪軸			ロタロナデ 切り離し後高台貼付 蓮弁文	鏡泉系 13C	
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考				出土位置
P8	不明	鉄	3.9	2.4	0.14	1.82	欠損不明				
P47	角釘等	鉄	(5.4)	(1.0)	(0.7)	(7.16)	一部欠損				
P124	台石	石	(29.0)	(26.7)	(8.8)	12600.00	上部欠損 使用2面 正面の磨行痕・裏面のナリ剥着				
Gr	種別	器種	法量			成形・調整・文様				規定値()・検存値< >凡点●	
			口径(㎜)	底径(㎜)	器高(㎝)	内面		外面		備考	出土位置
1	白磁	蓋	-	4.2	(2.3)	ロタロナデ→輪軸			ロタロナデ→回転未切り→高台貼付 輪軸	13C後半	ホ-7
2	灰釉陶器	碗	-	(7.0)	(1.8)	ロタロナデ			ロタロナデ→回転未切り→高台貼付	回転実測	ホ-6
3	真直器	壺	-	(16.0)	(4.4)	ナデ			平行タタキ→下部ヘラケズリ	回転実測	ナ-7
4	陶文	鉢鉢	-	-	-					新出実測	ナ-7



遺跡遠景(南側の発掘調査部分は現在の佐久平浅間小学校)



西側調査区全景(西より、遠方に平尾山を望む)



H1号住居址全景(東より)



H1号住居址炉全景



H1号住居址検出状況



H1号住居址とM1号溝状遺構



H2号住居址とH3号住居址(南より)



H2号住居址とH3号住居址掘方(南西より)



東側調査区近景(手前の掘り込みがH2号住居址とH3号住居址)



H4号住居址(北より)



H5号住居址全景(南東より)



H5号住居址カマド全景



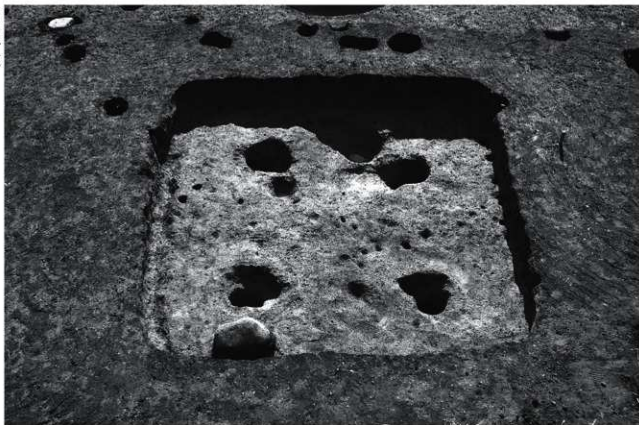
H5号住居址カマド掘方



H5号住居址カマド遺物出土状況



H5号住居址掘方



Ta1 号堅穴状遺構全景(北より)



Ta1 号堅穴状遺構覆土堆積状況



西側調査区遺構検出状況



D 1号土坑全景(西より)



D 2号土坑全景(東より)



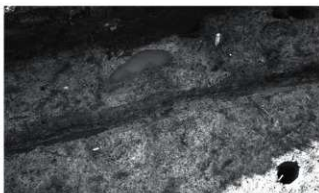
D 3号土坑全景(東より)



D 4号土坑全景(東より)



D 5号土坑全景(東より)



D 6号土坑全景(東より)



D 7号土坑全景(西より)



D 7号土坑遺物出土状況(西より)



D 8号土坑全景(西より)



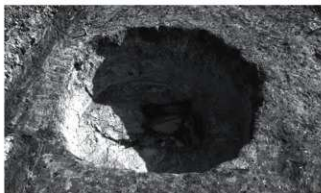
D 9号土坑全景(北より)



D10号土坑全景(北より)



D11号土坑全景(東より)



D12号土坑全景(西より)



D12号土坑戸杵検出状況



D13号土坑全景(北より)



D14・15号土坑全景(東より)



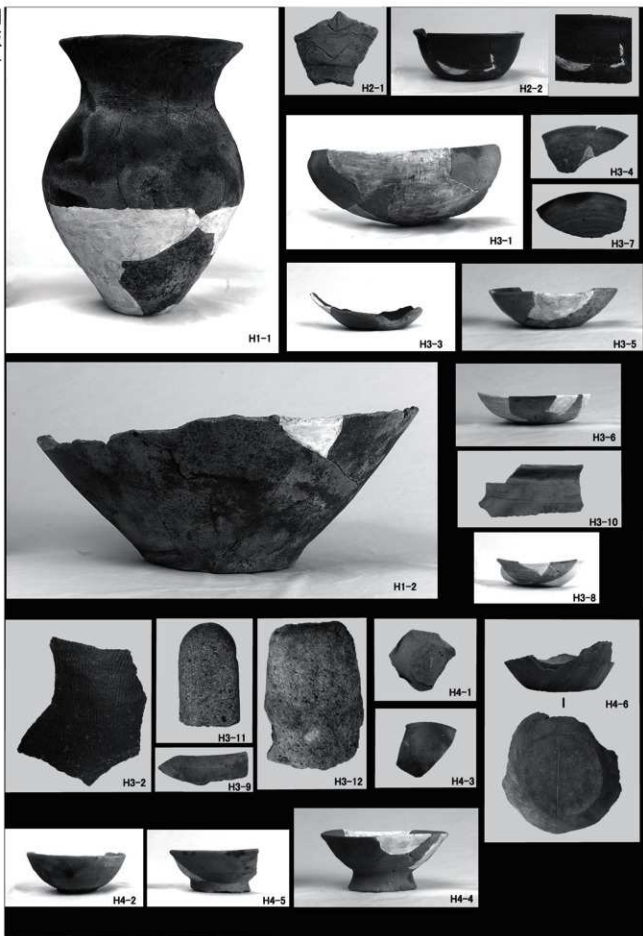
M1号溝状遺構全景(西より)

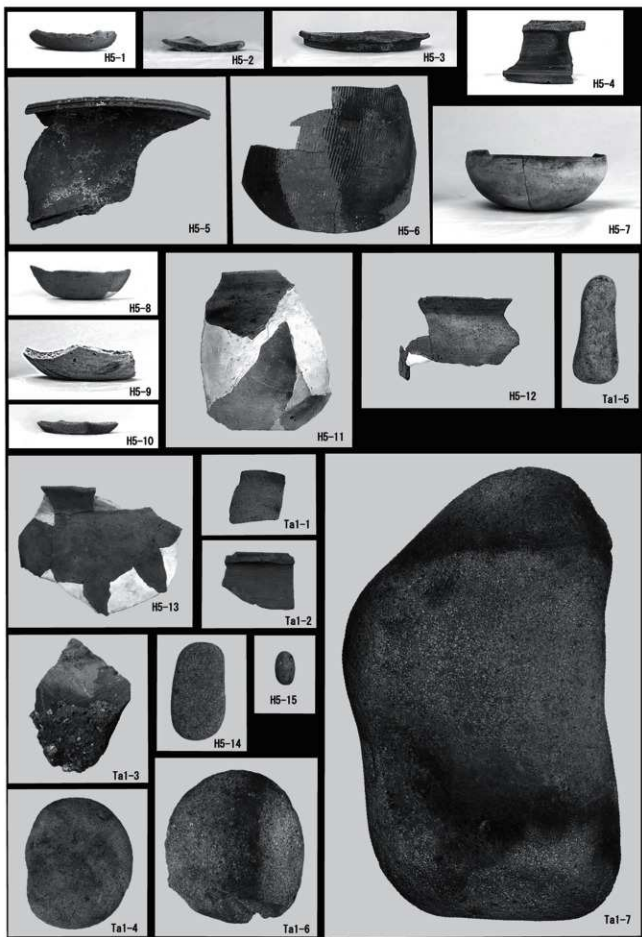


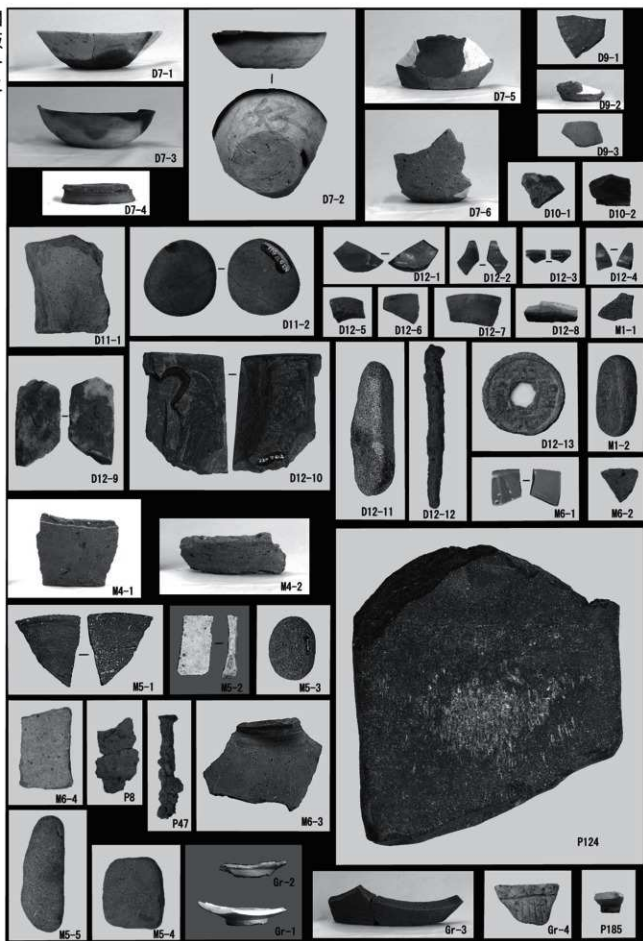
M4号溝状遺構全景(北より)



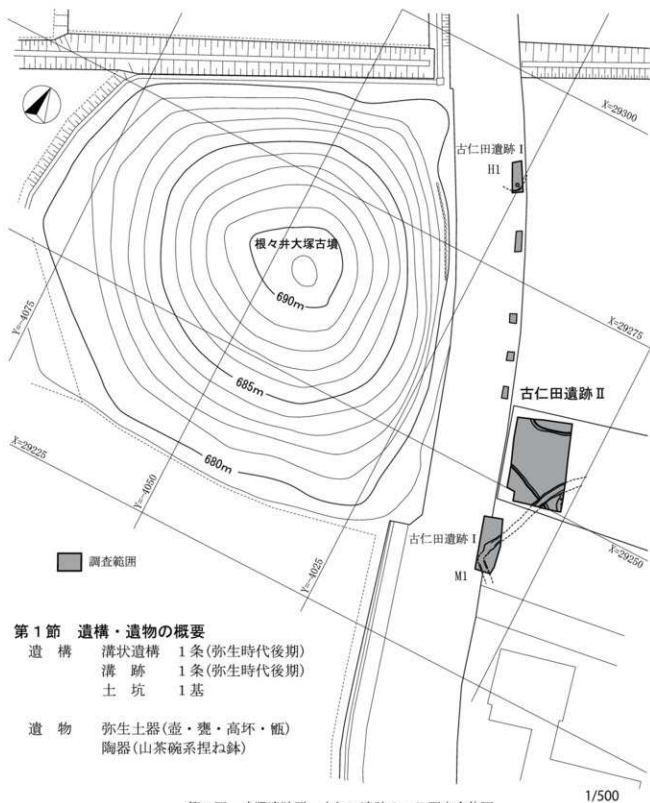
M5・6号溝状遺構全景(東より)







第VI章 古仁田遺跡IIの調査



第25図 鳴澤遺跡群 古仁田遺跡 I・II 調査全体図

第2節 基本層序

本調査区は湯川右岸の河岸段丘上に位置し、北に濁川が流れ、周辺部に河川特有の氾濫源を形成している。本調査で確認された土層を以下のⅠ～Ⅳ層に大別する。

- Ⅰ層 灰褐色を呈する、粘質の水田耕作土表層である。
- Ⅱ層 赤褐色を呈する、粘質の水田耕作土下層である。
- Ⅲ層 黄褐色を呈する、ややしまりのあるシルト層である。
- Ⅳ層 やや砂質の黄褐色土であり、浅間第一軽石流の二次堆積によって形成されたと考えられる地山である。
Ⅱ・Ⅳ層上面で遺構が確認できる。

679.9

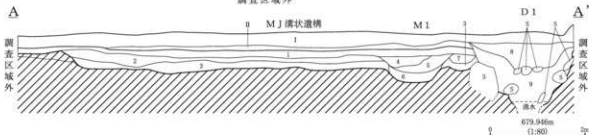
679.5

679.0

678.5

第26図 基本層序模式図 (1:30)

第七章 遺構と遺物



- Ⅰ. 水田耕作土
- Ⅱ. 晦暗褐色土層 (7.5YR2/3)
- 1. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 軽石、赤色粒。
- 2. 黒色土層 (7.5YR2/1) 軽石、赤色粒、炭化物。
- 3. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 軽石、赤色粒、炭化物、ローム粒、ロームブロックや多く含む。
- 4. 黒色土層 (7.5YR2/1) 軽石、赤色粒、炭化物。
- 5. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 軽石、赤色粒、炭化物。
- 6. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 軽石、赤色粒、炭化物、ローム粒。
- 7. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 軽石、赤色粒、炭化物。
- 8. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒、赤色粒、炭化物。
- 9. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒、赤色粒、炭化物、礫(10~70cm)、砂混じる。

第27図 D1号土坑・M1号溝跡・MJ溝状遺構実測図

(1) M J 溝状遺構(低地状の溝跡)

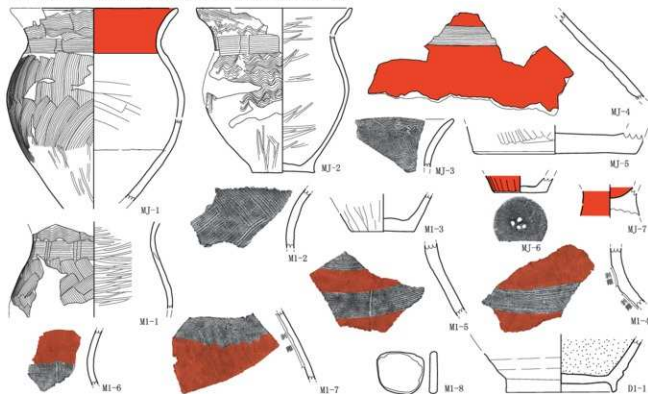
調査区全域にわたり存在し、およそ北東から南西に向かって緩やかに傾斜する。M1号溝跡に切られる。北側の遺構の落ち込みは緩やかな傾斜であり、南側は急な傾斜を示す。規模は南北9.7m、東西は調査規模で7.9m、深さは検出面から床面までの最深部で40cmを測る。覆土はやや粘質の黒褐色土である。遺物は弥生時代後期の土器が含まれている。部分的な調査であるため、人為的に掘り込まれたものか自然の低地形であるかの判断はできなかった。時期は、弥生時代後期の土器が覆土内全体に含まれていることから、弥生時代後期の遺構としたい。

(2) M1号溝跡

調査区南東に位置し、M J 溝状遺構(低地状の溝跡)を切る。規模は確認面上の幅1.1m、底幅0.7m、長さは調査規模で5.4mを測る。覆土は黒褐色土で、M J の覆土に比してやや黒味が強い。遺物は弥生時代後期の土器が出土した。時期はM J を切ることから、M J に後出する弥生時代後期としたい。古仁田遺跡 I で発見されたM1と同一遺構であると考えられる。

(3) D1号土坑

調査区南東隅に位置し、遺構の東側3分の2は調査区域外となる。規模は調査規模で南北1.9m、東西0.7m、深さは1.5mを測る。遺構内の壁周囲及び内部には、直径30cmを超える石が埋め込まれていた。遺物は陶器の捏ね鉢と思われる破片が一片出土した。遺構については、部分的な調査ではあったが井戸跡である可能性が考えられる。時期は、遺物が一片と僅かであるため断定はできないが、出土遺物は13世紀後半の様相を示している。



第28図 D1号土坑・M1号溝跡・MJ溝状遺構出土遺物実測図

第7表 D1号土坑・M1号溝跡・MJ溝状遺構出土遺物観察表

番号	器種	器形	口径	底径	器高	調整・文様・備考	残存率・部位	色調
MJ-1	弥生土器	甕	(17.8)	-	<21.3>	内面口縁へラツテ、赤色塗部、胴部下部 丹波川流域産物 底径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文	50%	外面: 9307/3 に近い暗褐色 内面: 9308/3 に近い暗褐色
MJ-2	弥生土器	甕	(16.6)	6.7	17.5	内面口縁へラツテ、赤色塗部、胴部下部 丹波川流域産物 底径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文	70%	外面: 9306/4 に近い暗褐色 内面: 9308/3 に近い暗褐色
MJ-3	弥生土器	甕	-	-	-	内面口縁へラツテ、赤色塗部、胴部下部 丹波川流域産物 底径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文	口縁破片	外面: 9306/4 赤色 内面: 9308/3 赤色
MJ-4	弥生土器	甕	-	-	-	内面口縁へラツテ、赤色塗部、胴部下部 丹波川流域産物 底径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文	肩部破片	外面: 9306/4 赤色 内面: 9308/3 赤色
MJ-5	弥生土器	甕	-	17.2	<2.9>	内面口縁へラツテ、赤色塗部、胴部下部 丹波川流域産物 底径文、胴部産物底径文、胴部産物底径文、口フツツ上 径文	底部70%	外面: 9307/6 暗褐色 内面: 9308/3 赤色

第8表 D1号土坑・M1号溝跡・MJ溝状遺構出土遺物観察表

番号	器種	器形	口径	底径	器高	調整・文様・備考	残存率・部位	色調
MJ-6	弥生土器	瓶	-	5.6	<1.8>	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径5.6cm厚さ1.4cm 1/3程度出土	底部75%	外底2.5186/4 濃い褐色
MJ-7	弥生土器	高坏	-	-	<3.0>	内面ヘラズリ、赤色塗彩 1/3程度出土	頸部～肩部	外底2.5184/6 赤色
M1-1	弥生土器	甕	-	-	<10.2>	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径10.2cm厚さ4.8cm 1/3程度出土	頸部	外底2.5184/7 灰褐色
M1-2	弥生土器	甕	-	-	-	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径10.2cm厚さ4.8cm 1/3程度出土	頸部破片	外底2.5187/3 濃い褐色地
M1-3	弥生土器	甕	-	6.5	<3.9>	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	底部100%	外底2.5184/1 灰褐色地
M1-4	弥生土器	壺	-	-	-	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	頸部破片	外底2.5185/8 赤色地
M1-5	弥生土器	壺?	-	-	-	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	頸部破片	外底2.5185/9 赤褐色
M1-6	弥生土器	壺?	-	-	-	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	頸部破片	外底2.5185/6 赤色地
M1-7	弥生土器	壺?	-	-	-	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	肩部破片	外底2.5185/6 赤色地
M1-8	弥生土器	土製円盤	長さ4.4	幅5.0	厚さ0.8	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	-	外底2.5185/7 赤褐色
D1-1	陶器(山茶碗系)	捏ね鉢	-	11.0	<6.1>	内面ヘラズリ、赤色塗彩の痕跡 外底部分、赤色塗彩の痕跡ヘラズリ、底径6.5cm厚さ3.9cm 1/3程度出土	胴下部～底部	外底2.5188/1 灰白色



調査前風景 (北西から)



試掘調査状況 (北から)



遺構検出状況 (東から)



調査風景 (北西から)



MJ溝状遺構 (北西から)



M1号溝跡 (北東から)



D1号土坑(南西から)



調査区全景(北から)



出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	すぼうばたいせきぐん だいずたいせきこ		なるさわいせきぐん こにたいせきに					
書名	周防畑遺跡群 大豆田遺跡V		鳴澤遺跡群 古仁田遺跡II					
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	富沢一明 上原 学							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913							
発行年月日	平成30年(2018) 10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すぼうばたいせきぐん だいずたいせきこ 周防畑遺跡群 大豆田遺跡V	さくしながとろ 佐久市長土呂 1723-1他	20217	8	36° 16.55	138° 27.31	20171106 ～ 20171129	761	宅地造成
なるさわいせきぐん こにたいせきに 鳴澤遺跡群 古仁田遺跡II	さくしねわい あざこまば 佐久市根々井字 駒場1074-1・ 1074-2	20217	96	36° 15.13	138° 27.19	20171124 ～ 20171130	94	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
周防畑遺跡群 大豆田遺跡V	集落址	弥生～ 中世	住居址5軒 竪穴状遺構1基 土坑16基 溝状遺構6本	土師器・須恵器・ 石器・鉄製品・陶磁器				
鳴澤遺跡群 古仁田遺跡II	集落址	弥生～ 中世	溝状遺構1条 溝跡1条 土坑1基	弥生土器・ 陶器(山茶碗)				
要 約	大豆田遺跡V 台地上に展開する弥生時代と奈良・平安時代集落の一部分を調査した。また、周辺の調査成果につながると考えられる中世の溝状遺構が確認され、区画エリアが想定できた。							
	古仁田遺跡II 遺跡の南を西流する湯川右岸の第2段丘南端の標高680mに位置する、弥生から中世の複合遺跡である。今回の調査からは弥生時代の溝状遺構、溝跡、中世と考えられる土坑が発見された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第255集
周防畑遺跡群 大豆田遺跡V 鳴澤遺跡群 古仁田遺跡II
平成30年(2018) 10月
編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
社会教育部 文化振興課文化財事務所
〒385-0051 長野県佐久市中込2913
☎0267-63-5321
印刷所 キクハライソク有限公司